



ちょっといい話

シリーズ②

「馬のまち笠松をつくり、笑顔をあふれさせたい」

馬をペットにして、みなと公園や町中を散歩しよう。

塚本幸典さんは、笠松競馬場の誘導馬に関わる仕事をしています。競馬が開催されない天気の良い日には、みなと公園や役場近くを、馬に乗って散歩することがあります。

なぜ、犬ではなく、馬と散歩をしているのでしょうか？

塚本さんが馬に乗って散歩をはじめられたのは、平成20年頃からで、馬を連れて町に行けば、町の人が笑顔になるのではないかと考えたからです。事実、馬を見た人は誰もが驚き、次には笑顔になります。競馬場が近くにあっても、町中の人々は、ほとんど馬との関わりがないことに、塚本さんはとても驚きました。

塚本さんの夢は、「馬がいつも身近にいる笠松町にすること」です。例えば、馬を犬のようにペットとして飼う人が出てきてほしいとのこと。競馬場があるおかげで、獣医さんや厩務員さんもいて、調教や病気対策も笠松町なら万全です。馬は犬のように吠えたりしないので、よいペットになります。馬や

ポニーを飼いたい方には、喜んで相談に乗りますとのことでした。

笑顔あふれる笠松町になることを願って、塚本さんはこれからも馬と一緒に散歩を続けます。



塚本さんと誘導馬
ウニー



競馬場の駐車場で町の人に囲まれる誘導馬に乗った塚本さん

身近で「ちょっといい話」がありましたら、中央公民館へ電話、FAX、郵送、メールなどでご連絡ください。お待ちしております。
☎388-3926 FAX388-3233
メールアドレス:kyouikubunka@town.kasamatsu.lg.jp

かさまつの民話『昔むかし』

日枝のおゆき⑤

「おい源齊殿は、どこへいかれた。」

茂平は、子どもがするように雪をすくいとってたべている吾介にたずねた。源齊殿がいけないのだ。

「源齊殿。源齊殿。」

村人は口々によび続けた。

そのとき、拝殿の屋根からわらい声が聞えた。それは、白い衣をまとい、髪を肩にたらし、すっきりと立つおゆきであった。

「みなさん、源齊殿は日枝明神の化身なのです。わたしはあの方の命令で、この村を救わんがために参った雪姫です。わたしの呼ぶ雪雲も熱病神にはばまれて来ることができなかつたのです。みなさんが源齊殿を信じ、力をあわせて

祈ってくださったので、熱病神をおい出すことができたのです。」

ゆきの声は、舞い散る雪の花が語るかのようにすきとおりの、神々しく伝わっていった。

「源齊殿は、またみなさまのお役に立つために弊社でおやすみです。」

おゆきはやさしくいった。

茂平をはじめ村人は、その場へへなへとすわりこみ、ただ手をあわせてひれふした。

おゆきのやさしい声が社にひびき、村人の背中に豊作の雪が白くつもっていったが、だれひとり顔をあげる者はいなかった。

遠くで雪合戦をする子どもの声がひびいた。
(おわり)



明治7年(1874年)頃までお湯立て行事が行われていた津島神社(江川)